

カナダ研究年報

The Annual Review of Canadian Studies
La revue annuelle d'études canadiennes

第 40 号

2 0 2 0

日本カナダ学会

The Japanese Association for Canadian Studies
L'Association japonaise d'études canadiennes

目 次

<論文>

- 20 世紀前半のカナダ平原諸州における沖縄県出身者の移住過程
..... 花 木 宏 直 1
- 19 世紀後半オンタリオ州立「精神遅滞」者施設の役割と実際
ー同州報告書の分析ー 下 司 優 里 18

<書評>

- 田林 明 編著『カナダにおける都市ー農村共生システム
ー農村空間の商品化と地域振興ー』（農林統計出版、2020 年）
..... 藤 田 直 晴 36
- ルース・アビィ 著、梅川佳子 訳『チャールズ・テイラーの思想』
（名古屋大学出版会、2019 年）..... 丹 羽 卓 41
- 長谷川瑞穂『先住・少数民族の言語保持と教育
ーカナダ・イヌイットの現実と未来』（明石書店、2019 年）..... 岸 上 伸 啓 46
- 和泉真澄『日系カナダ人の移動と運動ー知られざる
日本人の越境生活史ー』（小鳥遊書房、2020 年）..... 下 村 雄 紀 51
- 水戸考道・大石太郎・大岡栄美 編著『総合研究 カナダ』
（関西学院大学出版会、2020 年）..... 田 中 俊 弘 56
- ### <文献リスト>
- 日本におけるカナダ研究・カナダ関連の近著 61

ルース・アビィ著、梅川佳子訳
『チャールズ・テイラーの思想』
(名古屋大学出版会、2019年)

丹羽 卓

本書は Ruth Abbey, Charles Taylor (Acumen, 2000) の全訳であり、著者によれば「今日の英語圏で最も影響力があり、最も豊かな業績を生み出している哲学者の一人である」(本書序文 1 頁) チャールズ・テイラーの思想への入門書である。だが、入門書が易しいとは限らない。扱うテイラーの思想が容易に理解できるものではないのであるから、本書が入門書でありながらその読解にいささか骨が折れるのは致し方ない。「訳者あとがき」によれば、本書の著者であるルース・アビィは、テイラーの思想の総合的な研究について中軸的な役割を担っており、原書はテイラーの思想を簡潔に記したものとして定評があるそうである。実際、非常に体系的かつ的確にテイラーの思想をまとめており、評者のような哲学や思想の専門家でなく、テイラーの著作の良い読み手でもない者にも、テイラー理解の道筋を示してくれる。他方、言い換えると、本書の趣旨はテイラーの思想の批判的検証ではない。つまり、テイラーへの批判的見解もいくつか紹介されているが、それに対する十分な議論がなされているわけではない。だが、テイラーの研究者や政治哲学・思想の専門家以外にはそれはむしろありがたい。専門的議論よりも、テイラーの思想の要諦がわかることのほうが有益だからである。

この書評の読者の多くにとっては、テイラーはカナダの多文化主義と深くかかわる思想家であり、またケベックという文脈では、2007年に設置された「妥当なる調整」をめぐるケベック州のブシャール＝テイラー委員会の共同委員長を務めた人物という認識であろう。しかし、なぜテイラーが多文化主義を支持し、ケベックを集合体として認めるコミュニタリアンのような態度をとるのかという思想的背景について十分理解できているかという点、いささか心もとない人もあると思う(評者がまさにそうである)。そんな人にとって、本書はテイラー理解の大きな助けになるだろうし、多文化主義やケベックについてのより深い考察へと導いてくれるだろう。

ただ、1つ注意しなければならない点がある。それは、本翻訳は2019年の出版であるが、

原書が出版されたのが2000年であり、執筆時期からするとテイラーの壮年期(テイラーの60代まで)を扱っているにすぎず、それ以降の約20年は射程に入っていないという点である。カナダ研究者にとって興味深い「承認の政治」の理念までは扱われているが、当然ながらテイラーの21世紀の思想的・実践的展開については触れられていない。たとえばテイラーは、共同委員長であったジェラルド・ブシャールと、2008年にブシャール＝テイラー報告をまとめた。それにもかかわらず、2019年にはケベック州の第21号法案の公聴会で「自分とブシャールは、報告書の宗教的標章に関する提言が与える衝撃についてナイヴだった」と述べ、自分の誤りを認めた(ブシャールも同法案には反対)。そうしたテイラーについては、当然ながら本書は何も語っていない。もちろんこれは、ないものねだりでしかない。むしろ21世紀のテイラーについては同時進行的に研究が進められ、本書に続く書物が書かれるのを待つべきであろう。

以上を述べたうえで、本書の内容に戻ろう。テイラーは「知の巨人」とも言える浩瀚な知識を持ち、学問的に多大な影響力があるだけでなく、積極的に社会に対して発言し、さらには政治活動も行うという、まさしく理論と実践の両面に生きる人物である。さらに半世紀を越える精力的な知的かつ実践的活動によって、その思索は深く広範に及ぶ。本書は、目次から明らかなように、第1章は道徳論、第2章は自己論、第3章は政治論、第4章は知識論、最終章は宗教論を扱い、これらについて彼の著作に基づいて丁寧に解説を加え、テイラーの思想を俯瞰できるようにしている。

まず、各章のポイントを押さえておこう(ただし、評者の関心を引いた部分ということで、各章の要約ということではない点に注意していただきたい)。第1章の「道徳を説明する」の鍵と著者がみなすのは、多元主義である。テイラーは、カントに代表される近代の原理主義的な一元的形式主義を批判し、善の中には普遍的なものもあれば、ネイションなどの集団に特有なものもあると考える。さらにテイラーは、いくつもある善の中に質の違いを認め、あるものは他よりも高く評価され、しかも、何を高く評価するかは文化や個人で異なることもあると主張する。他方、テイラーはニーチェ流の主観主義に与するのでもない。善は個人の主観とは独立に客観的に存在するという道徳的実在論に立ち、善性の源泉を神に求める。往々にして多元主義は世俗主義と結びつくので、ここにテイラーの独自性が見て取れる。

第2章の「自己を解釈する」が焦点を当てているのは、人間は自己解釈をする主体であり固有の目的を持つ存在だというテイラーの理解である。そこから2つのことが導かれる。1つ目は、自己解釈に言語が重大な働きをする(言語を通じて善の評価が可能になり、アイデンティティ構成ができると主張する)ことである。この点は、言語をコミュニケーションの道具とみなす考えを否定し、自己表出の手段であるとする18世紀のヘルダーなどのロマン主義的言語観に回帰することに繋がる。2つ目は、人間は各人が置かれた

共同体の中で自己解釈を行うので、その共同体の価値観の影響下に置かれることである。この点は、自己は原子論的に存在するのではなく、他者との対話によって形成されるとの認識となり、「自律的で自己責任を持つ」というリベラルな自己観を批判する。そして自己が対話的であると考えため、ここでも言語が重視されることになる。

第3章の「政治を理論化する」では、テイラーは典型的なコミュニタリアンではなく、それとは一線を画する「限定的コミュニタリアン」だという著者の主張が興味深い。個人は常に社会関係に置かれ、個人の選択と善の評価が文化的背景の中で初めて可能となるとする点で、テイラーはコミュニタリアンである。それゆえ、個人は自らの社会の善を肯定する限りにおいて、その維持と再生産に貢献する義務を負うと主張する。このことはテイラーの共和主義につながり、民主政治への参加の必要が強調される。ここから市民的ナショナリズムの肯定へと向かうのである。さらに、ここでも公的空間を創出する言語の働きが注目される。しかし、テイラーは確かにコミュニタリアンだが、リベラリズムを拒否しているのではなく、主流をなす単一の原理主義的リベラリズムを批判しているだけだということから、著者はテイラーを「限定的コミュニタリアン」と評価しているのである。なお、この問題については、中野剛充『テイラーのコミュニタリアニズム』(勁草書房、2007年)が興味深いので、紹介しておく。

第4章の「知識を理解する」では、テイラーが、人間を研究する学問の手法と自然科学の手法とを区別する必要性を強く主張していることが強調される。それはテイラーが人間を自己解釈的存在だと考えているからである。しかし、人文科学・社会科学において人間と文化を重視しすぎると、通約不可能性(incommensurability)の問題が生じるが、テイラーはそれをガダマーの「地平の融合」という概念で乗り越えようとする。17世紀の科学革命へのテイラーの態度を、著者は「西洋思想における、理性の科学的なモデルへのヘゲモニーに注目し、それを押し返そうとする」(226頁)ものだと述べている。テイラーは科学革命の認識論的遺産としての、客観性・中立性の追求、手続き主義、道具主義といったものは、自然科学において妥当であっても、それが他の知の領域にまで浸透していることに警告しているのである。この章で言語についても述べられているが、それについては後に取り上げる。

第5章「結び—世俗性の源泉」では、宗教が近代的な人間主義にとって代わられるとう世俗性の一般的・伝統的説明に挑戦するテイラーの姿が描かれる。一般に世俗性は、宗教的信仰の衰退、教会と国家の分離、公的領域からの宗教の消滅などとらえられているが、テイラーがその考えに反対し、宗教的信仰は衰退しているのではなく、多元化が起きているのだというのがテイラーの主張である。国家と宗教の分離の目的は、宗教を公的領域から追い出すことでなく、単一の信仰を押し付けないことだとも彼は言う。啓蒙主義は有神論からの解放を進歩とみなすが、テイラーは近代で起こったのは有神論の

周縁化だとみなし、世俗性は「古い信仰の道を閉ざし、新たな信仰の道を開いた」(277 頁)と主張している。

以上はあくまでも評者の興味を引いた点で、本書を網羅的に取り上げたのではないこととはご理解いただきたい。ただ、これらの点を抑えれば、なぜテイラーが多元主義を擁護し、「承認の政治」を主張し、ケベックのナショナリズムに反対しないのかがわかる。最初に述べたように、本書はそうした事柄について、テイラー理解の大きな助けになるのである。

最後に気になる点をひとつ取り上げる。著者は、テイラーの「人は、なによりもまず、言語を使う動物である」(91 頁)という言葉を用い、言語がテイラーの思想展開にとって極めて重要だったと述べ、随所で言語に言及する。しかし、本書で言語を正面から取り上げた箇所は、251-255 頁のわずか 5 ページに満たない。

この箇所は本書の終わり近くに置かれ、そこでは、それまででテイラーの言語観について語られたことがほぼ繰り返されているに過ぎない。新しいこととしては、フェルディナン・ド・ソシュールのラング/パロールの区別に触れられているが、わずか半ページほどでしかない。このことに、学究生活を言語学から始めた評者はいささか奇異な印象を受ける。テイラーが若き研究者として精力的に研究活動を展開していた 1960～70 年代には、フランスだけでなく西欧や北米でも、構造主義が知的領域で猛威を振るい、ソシュールはその嚆矢として奉られていたからである。テイラーがそれを知らないはずはない。それにもかかわらず、言及しているのがラング/パロールの二分法でしかないというのは、ソシュール言語学の初歩的理解にとどまっていると言わざるを得ない。254 頁の「ある語彙のうち複数の言葉は、それらの言葉を区別する差異からその意味を引き出している」というテイラーの主張は、まさにソシュールが言葉の意味が差異によって決まると主張したことそのものであるのに、そこにソシュールの名前は出てこない。これは著者のアピイ問題なのか、テイラー自身の問題なのか。

また別の疑問もある。著者は、テイラーがドイツ・ロマン主義に立つ言語学者ヘルダーを高く評価し、その系譜にあることを何度も強調している。ソシュールもまた言語を道具のようにとらえるのではなく、むしろ言語が人間の認識を規定するという考えにおいてヘルダーやフンボルトの流れをくむ。しかし、本書を読む限り、なぜかこの文脈においてソシュールへの言及はない。テイラー自身がその関係に気づいていないのか、著者がソシュールへの言及を不要と考えたのか、それはわからない。はたしてテイラーは、ヘルダーの影響を受けたソシュール言語学やサピア=ウォーフの言語相対性仮説には見向きもしなかったのであろうか？また、テイラーの同時代人の言語学者ノーム・チョムスキーもヘルダーやフンボルトを高く評価し、言語は本質的にはコミュニケーションの手段ではなく、思考とその表現に使用されるものだと明言している。こうした言語学の

巨人たちがヘルダーに注目したことを、言語学者ではないテイラーが知らなくても当然なのかもしれない。しかし、言語をそれほどまでに重視するテイラーが言語学に関心を持たなかったとしたらそれはなぜか。興味深い問題である。

実は、テイラーは本書の原書が出版された後、*The Language Animal: The Full Shape of the Human Linguistic Capacity* (Harvard University Press, 2016) を出版している。言語を正面から取り上げたテイラー初の書物であろう。この書物でテイラーの言語に関する思索がどこまで深まっているのか興味深いところである。

最後に一言。原書は晦渋ではないものの、決して容易な書物ではない。それを読みやすい日本語に移しかえた翻訳者の力量には敬服する。評者もこれまでに何冊かの学術書翻訳の経験があるが、正直それは苦闘の連続である。そして正しく翻訳をするには、原書に書かれている内容の数倍の知識の裏付けを要する。その点、まだ若い研究者がこの翻訳を単独で成し遂げたことは、十分称賛に値すると言えよう。

(にわたかし 金城学院大学)

The Annual Review of Canadian Studies
Le revue annuelle d'études canadiennes
KANADA KENKYU NENPO

2020

No. 40

Articles

- Okinawan Migration Processes in the Canadian Prairies
in the Early 20th Century..... Hironao Hanaki
The Role and Reality of the Orillia Asylum for Idiots
in the Late 19th Century Ontario Yuri Geshi

Book Reviews

- Akira Tabayashi, ed., *Kanada-ni-okeru Toshi—Noson Kyosei Sisutemu (Urban-rural Symbiotic Systems in Canada: The commodification of rural space and regional promotion)* (Agriculture and Forestry Statistics Publishing Inc.,2020)
.....Naoharu Fujita
Ruth Abbey, *Charles Taylor (Philosophy Now)* (London: Acumen, 2000)
trans. by Yoshiko Umekawa (The University of Nagoya Press, 2019)
..... Takashi Niwa
Mizuho Hasegawa, *Senju-Shosu-Minzoku no Gengo-hoji to Kyoiku (Language Retention and Education of Indigenous and Minority Peoples)*
(Akashi Shoten, 2020)Nobuhiro Kishigami
Masumi Izumi, *Nikkei Kanada-jin no Ido to Undo — Sirare-zaru Nihonjin no Ekkyo-seikatsu-shi (Japanese Canadian Movement)* (Takanashi Shobou, 2020)
..... Yuki Shimomura
Takamichi Mito, Taro Oishi, and Emi Ooka eds., *Sogo Kenkyu Kanada (Understanding Canada: An Interdisciplinary Approach)*
(Kwansei Gakuin University Press, 2020)..... Toshihiro Tanaka

Recent Publications on Canadian Studies in Japan

The Japanese Association for Canadian Studies
L'Association japonaise d'études canadiennes